

適性検査 I

注意事項

- 1 問題は **1** のみで、1～5ページに印刷してあります。
- 2 試験時間は四十五分間です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 5 答えを直すときは、消しゴムできれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 6 小学校名・受験番号・氏名（ふりがな）を解答用紙の決められた欄（まど）に記入してください。

1

次の資料A、資料Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

〔丸で囲んだ数字がついている言葉には、それぞれ資料のあとに「注」があります。〕

資料A

中高生の頃、学校の先生がよくこう言っていたことを思い出す。「社会は厳しいぞ」、「社会に出たら通用しないぞ」。

そう説教された生徒の側はといえば、「先生こそ社会に出たことないじゃないか」と陰で反発するのが常だった。そして、同様の物言いは大人の口からも、まさに常套句^①として発せられがちだ。「学校の先生は社会に出たことがないから常識がない」、「社会人として揉まれたことがないから、教師には未熟な者や非常識な者が多い」、等々。

しかし、そこで言われている「社会」とはどこのことだろう。「社会に出る」とは何をすることを意味するのだろう。「社会人」とは誰のことを指すのだろうか。

「社会に出る」ということが、たんに教職以外の業種の仕事に就くことを意味し、「社会人」とはそうした仕事をしている人のことを指すのであれば、社会に出ることも社会人になることも至極簡単だ。そして、どの職種や職場にも、未熟な者や非常識な者が嫌というほどいることを、私たちは知っているはずだ。同じ仕事を続けている人である

うと、転職を経験した人であろうと。

なかでも厄介なのは、ひとつの場所に慣れて未熟でなくなったベテランが、それゆえに偏った考え方に凝り固まってしまいうケースだ。年を経て経験を積むごとに、当人にとっての「社会」はかえって狭くなる傾向すらあるのだ。

「社会」とは、決して一枚岩ではない、多様な人々が直接的・間接的にかかわり合いながら生きる場だ。その意味では、子どももすでに社会に出ている。そして、彼らにとって社会は決して楽なものではないし、大して守られているわけでもない。日々厩大な務めを果たし、大人と同様のシビアな人間関係——しかも、大人よりも遙かに露骨な人間関係——と、直接的な暴力の危険に曝されている。

私たちはよく、子どもの頃に戻れたら、と夢想する。けれども、もし私が頭の中はそのまままで体だけが小学生になり、あの名探偵コナンのように子どもとして暮らすことを本当に強いられるとすれば、私はその状況にとっても耐えられないと思う。

では、「ひとり立ちする」ことが「社会に出る」ことなのだろうか。いや、文字通りの意味で自立している大人など誰もいない。その仕事や生活が、どれほど多様な人々に依存していることか。

脳性麻痺の当事者である医師の熊谷晋一郎さんは、あるインタビューのなかで、「自立」の反対語が「依存」だというのは勘違いだと指摘

している。たとえば熊谷さんが挙げているのは、東日本大震災（だいしんさい）のときに職場のエレベーターが止まり、自身が五階の研究室から逃げられなかったエピソードだ。健常者であれば、エレベーター以外にも階段やハシゴという別の依存先もあるから、下に降りられる。しかし、身体（からだ）の自由が利（き）かない熊谷さんには、そのときエレベーターしか依存先がなかった。

熊谷さんによれば、「依存先が限られてしまっている」ということこそ、障害の本質にほかならない。逆に言うなら、「実は膨大（ぼうだい）なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、「自立」といわれる状態（じざり）だということである。

⑤ 健常者は何にも頼（たよ）らずに自立（じざり）していて、障害者はいろいろなものに頼（たよ）らないと生きていけない人だと勘違い（かんちがい）されている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存（いそん）できていて、障害者は限られたものにしか依存（いそん）できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存（いそん）してないかのよう（よう）に錯覚（さくかく）できます。健常者であるというのはまさにそういうことなのです。

誰でも、否（いや）が応（おう）でも、すでに社会に出ている。にもかかわらず、敢（あ）えて「社会に出る」と言うのであれば、それは社会の多様な場所、多様な側面（たかな）にかかわるようになることを指す——そう私は理解（りかい）したい。

ひとつの場所の方法や慣習（かんじゆつ）にただ順応（じゆんおん）するのではなく、むしろそれを相対的に見て、別の可能性を想像（さうぞう）できる場に立つことを意味する、と考（かんが）えたい。

繰り返（くりか）すように、社会は一枚岩（まいが）ではない。「社会は厳しい」のではなく、社会は特定の人々に厳しい。敢（あ）えて「社会人」という、ある者を別の者と区別する言葉を用いるのであれば、社会の偏った厳しさを和らげようと努め、相互依存（さうご）の網（あみ）の目からこぼれ落ちる人々に手を伸ばす者を、「社会人」と私は呼びたい。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による）

【注】

- ① 常套句……決まり文句。
- ② 至極……きわめて。まったく。
- ③ 膨大……きわめて数量の多さま。膨大に同じ。
- ④ 依存……他のものに頼って生活または存在（そんざい）していること。
- ⑤ 出典……「自立は、依存先を増やすこと希望は、絶望を分かち合うこと」、『TOKYO人権』第五六号、二〇二二年二月二七日 (https://www.tokyo-jinken.or.jp/publication/tj_56_interview.html)
- ⑥ 否が応でも……好むと好まないにかかわらず。
- ⑦ 慣習……ある社会一般に行われているならわし。

資料B

「誰かと付き合うのも自由、付き合わないのも自由で「人それぞれ」といつても、多くの人はつながりを望んでいます。裏返すと、孤独・孤立を望んでいる人はあまりいないのです。認知科学の研究では、仲間はずれの痛みは、身体的な痛みと同じ反応を脳に引き起こす可能性があるとされています。

その一方で、つながりから退くことを「人それぞれ」として受け入れられる社会では、あらかじめ、つながることを保障された関係性はわずかです。孤立が嫌な人は、つながりを自己調達しなければなりません。

しかし、誰もが意中の相手をつなぎ止められるわけではありません。意中の相手をつなぎ止めることができるのは、つなぎ止めるに足るだけの魅力や資源を備えた人にかぎられています。この仕組みを簡単に説明しましょう。

人間関係を「人それぞれ」に選べる社会とは、同じように「人それぞれ」の選択肢をもつ相手から、自らを選んでもらわなければならぬ社会とも言えます。このような社会では、相手の気持ちを満たすことのできる資源に恵まれた人ほど、豊富な関係を手にするようになりません。逆に言えば、相手を満足させる資源をもたない人は、あまり目を向けられないということです。

最近の大学生のなかには、自らの友人関係を「コスパで選ぶ」と堂

々と話す人もいます。つまり、コストに見合ったパフォーマンスを発揮できる人とのみ付き合うということです。とても合理的な考え方で

「自らにとってよい要素をもつ人を選択する」という原理を徹底させれば、「コスパ」という言葉に行き着くのもうなずけます。しかし、人間関係のコスパ化が進んだ社会では、自らもコストと見なされてしまうリスクを絶えず背負うこと、誰かがコストとして切り離されていくことを忘れてほしくないものです。

私は、東京近郊に住む人を対象に、二〇一六年に実施された『首都圏住民の仕事・生活と地域社会に関する調査』（代表：早稲田大学 橋本健二）のデータを使って、孤立しやすい人の特性を探ったことがあります。具体的には、「日ごろ親しくし、または頼りにしている家族・親族」「友人・知人」が0人の人を孤立者と定義し、どのような属性で孤立との関連が深いのか分析しました。

すると、経済力のない人、学歴の低い人、結婚していない人、健康ではない人といった、いわゆる、世間的に「よい」要素をもたない人が孤立しやすいことがわかりました。その他の調査研究でも、だいたい同じような結果が得られています。先ほどの結婚のデータと合わせて考えると、社会的に厳しい立場にいる人が、つながりから外れている（外されている）と言えそうです。

その一方で、孤立することすらも「人それぞれ」として受け入れる

社会で、実際に孤立している人に注がれる視線は、優しいものではないかもしれません。というのも、孤立することも、結婚しないことも、「人それぞれ」の選択の結果ゆえ気にかける必要はない、と見なされてしまうからです。あるいは、孤立している人や結婚できない人は、相手の支払うコストに見合うほどのパフォーマンスを発揮できない人とみなされる可能性もあります。さきほどのコスパの原理の話です。

「人それぞれの社会」は、「人それぞれ」に選択した結果として生じる格差には、あまり目を向けません。むしろ、引き起こされた結果の責任を、当事者の選択に帰することで、格差を正当化する性質があります。

しかしながら、現在起きている現象を、「人それぞれ」に選んだ結果だ、と見なす考え方には、そうとうの無理があります。生まれた家によって、それぞれの人が到達する学歴や職業的な地位が違うことは、学歴や職業の達成を射程にした研究（社会階層研究などと言われています）の成果からも明らかです。

そもそも、人びとがそれぞれの局面で本当に選択をしているのかどうかすら疑わしいですし、選択そのものも環境にそうとう左右されます。私の学生の話ばかりで恐縮ですが、地方から出てきた学生さんは「中学受験という選択肢はなかった」とよく話しています。そのように考えると、「人それぞれ」に平等に選べる状況は、かなり限られていると言えるでしょう。

私たちは、「人それぞれ」と言いながらも、心のどこかで「望まし

い結果」は共有しています。また、社会は④序列に溢れており、人びとの決定にはさまざまな要素が影響しています。このような社会で「人それぞれ」に選んだ結果は、けっして、平等にはなりません。にもかかわらず、私たちは、さまざまな決定に対して、「人それぞれ」に選んだものとして処理し、あまり⑤関与しようとしません。一見、寛容な「人それぞれの社会」は、結果としての不平等を見過ごす冷たい社会でもあるのです。

（石田光規『「人それぞれ」がさみしい』による）

【注】

- ① 認知科学……………「知能・認識」の理解・解明を目ざす学問。
- ② コスト……………費用。経費。
- ③ パフォーマンス……………効率。
- ④ 序列……………順序をつけてならべること。
- ⑤ 関与……………ある物事に関係すること。

〔問題 1〕

資料 A

『社会に出る』とは何をすることを意味するのだろうか。」とありますが、「社会に出る」とはどういうことでしょうか。百字以内で説明しなさい。

ただし、一まず目から書き始め、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

〔問題 2〕

資料 B

『人それぞれ』に選んだ結果は、けつして、平等にはなりません。」とありますが、なぜ平等にならないのでしょうか。百字以内で説明しなさい。

ただし、一まず目から書き始め、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

〔問題 3〕

あなたは「社会人」として、どのような行動をとりたいと考えますか。

資料 A

資料 B

の内容をふまえ、

具体的な場面を考え、あなたの意見を理由とともに四百字以上四百五十文字以内で書きなさい。

ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。